

## 或る農業研究員の 放浪記 (6)

さすらいの研究者

## 第6話 楽しい農業研究 —研究現場における生物との遭遇—

農業研究の仕事に就いてかれこれ三十有余年。これまで、農業の試験研究に携わる中で、いろいろな場所に出かけて、様々な生き物と出会いました。生き物との出会いは、農業研究の楽しみのひとつとも言えます。第6話では、農業研究と関連してこれまでに会った生き物について断片的に紹介したいと思います。

## 動物との遭遇 —福島編—

報道などでご存じの方もあろうかと思うが、福島原発被災地では、一時期、野に放たれた牛や豚が問題となっていた。また、無人の集落ができたことで、イノシシやニホンザル、ツキノワグマなどが勢力圏を拡大している。

私はまだクマには出会ったことはないが、イノシシやサルには何度となく遭遇した。実際、遭遇しただけでなく手痛い実害を受けたこともある。2018年に大熊町大川原地区で行った水稲の試験栽培では、収穫前の稲を徹底的になぎ倒され、そして食べられてしまった。収量調査ができなかったほどだった。後から思えば対策が甘かった。犯人はイノシシで、イノシシよけの電気柵を設けていなかった死角の水路を飛び越え侵入してきていたのだ。



図1 イノシシの襲撃を受けた水田にて (福島県大熊町)

イノシシは、土中の根や芋そしてミミズやら、普段はそんなものを食しているようで、田んぼの畦とか水路や農道の縁やらに穴を開けて崩してしまう。ため池の堤防の表面も掘り返されて穴だらけのボコボコである。イノシシは、”秋は夕暮れ”に出没することが多い。寒さの厳しい阿武隈山地の冬を控えて、イノシシも人恋しくなっているのかもしれない。



図2 調査現場で見かけたイノシシたち

また、イノシシは、集団で行動していることが多い。かわいいうり坊を引き連れている親子イノシシをよく見かける。車で農道を走っていると併走してくれることもある。そしてイノシシはよっぽど腹の虫の居所が悪くなければ、人間に向かってくることはない。

だまっていると、少し近寄ってくることもあるが、こちらから接近しようとするとう逃げていく。ある日の夕方、田舎道で5～7 m程度を間に挟んで、イノシシの一团（家族か）と対面することがあった。こちらが一步足を引くと、先方は前足を一步前に出す。こちらが一步足を前に進めると、先方は前足を一步引く。シンクロした動きをするのが面白かった。普段のイノシシとはいつか通じ合うことができるかもしれないと思った。

一方で、気が立っているイノシシは怖い。一度、雪の中をまわりの人や車を威嚇するように、猛スピードで目前をかすめて通過し小川を渡って谷の反対側の斜面まで一気にダッシュして登っていった個体と遭遇したことがある。しかし、機嫌を損ねている動物が怖いというのは、相手が人間でも同じことである。

私は現地で夜遅くまで作業をすることがある。圃場での実験・調査のため、浪江町の川べりの田んぼで作業に没頭していたときのこと、陽はすっかり落ちて、あたりは真っ暗。手元の小さな明かりをたよりに作業をしていると、不意に野獣の気配を感じた。そして荒々しい鼻息が聞こえてくる。姿は見えないが明らかに近くに大型のイノシシがいる！ しかし、私は焦ることはなかった。なぜなら、試験圃場はイノシシよけの鉄柵で囲まれており、その中にいけば安全なはずなのだ・・・。

図3 暗闇に猪の気配を感じた夜



イノシシと比べるとサルは怖い。風貌がイノシシによく似たN研機構の獣害研究の某研究員が言うのだから間違いない。いわく、「イノシシはともかくサルには気をつける」と。

ある日、ひとり阿武隈山中のため池で調査をしていたときのこと、知らぬうちに東の山からサルの群れが接近してきていた。私が溪流で水文観測に熱中していると、遠くでガサガサと音がして、一匹のサルが横切っていった。それを合図に、あちこちでガサガサと音がして、何匹かのサルの姿が見えるようになった。私は反射的にスコップを握りしめて身構えた。すると突然、北側の山中にいたサルが、こちらに向かって斜面を猛スピードで駆け下りてきて、あと 10 m ないかというところでピタリと止まり、我が輩をにらみつけ奇声を発した。明らかな威嚇行為である。ボスザルか若頭か分からないが、外的脅威を見張り威圧して、その間に、群れを安全に通過させようと企んでいるのだ。こちらは、おサル軍団が脇を静かに通過していく分には異存ないが、威嚇され、にらまれているのは気に入らない。そこで、我が輩もにらみ返し、大声で対抗する。こうなったら、サルと人間、霊長類同士のタイマンだ。



図4 ボスザルか！？（福島県飯舘村）

キューバ危機の際、あれよあれよという間に、米ソ対立がエスカレートし一触即発の状況に至った場面が目につく。しかし、少し落ち着いてみると、言葉は通じなくともコチラは相手の意図を理解できた。そして、おそらくこちらの主張も概ね相手に伝わったのではないかと思う。そんなことをあれやこれやと考えるうちにも、足元がおぼつかない子連れを連れたサルやらご老体のサルやらがガサガサ・ガヤガヤと通過してゆく。そして、群れの最後のサルが通過したころ、気がつくところらににらみを効かせていたボスザルも、いつの間にか森の中に姿を消していた・・・。

図5 電線を渡るサル

ニホンザルは電線を渡ることができるゆえ、実験圃場の近くに電線や電柱がある場合には、獣害対策として上からの侵入にも備える必要がある。





図6 ポスザルと対峙した山中のため池（福島県飯舘村）

一度だけ、キツネと遭遇したことがある。晩秋の寒い日だったと記憶している。まだ、住民の立入が制限されていた地域にあるため池脇の国道上での出来事だ。以前、北海道では何度かキタキツネを見たことはあるが、本土でキツネは初めてだった。

そのキツネは人を恐れず近づいてきて、その美しい毛並みを自慢するように目の前を優雅にスローモーションで通過した。尻尾はあつらえたマフラーのように毛先一本一本まで艶やかに立ち、気品に満ちていて見事であった。その立ち振る舞いは、とても野生動物のそれとは思えなかった。住民が避難する前には餌付けされていたのかもしれない。人間との距離が近い野生動物であると感じた。

同ため池では、特別天然記念物のニホンカモシカを見かけたことがある。カモシカは学生時代に秩父の山奥で見かけて以来の遭遇であったが、近年は個体数が増えて農産物や林業への被害も酷くなっているようだ。場所は全然違うが、何年前か、長野県の南アルプス山系の山中の地すべり地へ調査に行ったとき、現地への行き帰りの森の中、どこもかしこも、獣道もそうでないところも足の踏み場のないくらいの鹿の糞が散乱しているのにはびっくりした。確実にものすごい密度で鹿が生息している。森林は明らかに人間のテリトリーではない。そういえば北海道の道東地方もものすごかった。経験された方もいるかもしれないが、レンタカーを運転するとき、会社の窓口職員からは鹿に注意するよう口を酸っぱくして注意されていたが、実際に運転してみるとそれ以上だった。道路の左右に鹿の群れが待機していて、いつ渡ってくるのか、分からないような状況が続いていた。なにかゲームのようだった。

・・・

浜通り地方の阿武隈山地と丘陵地の境界付近に位置するため池調査に赴いた際、同行した業務科職員がクマの足跡を発見したことがある。近年、クマも生息域を広げているようで、福島県内でも福島市内を含めて各地で目撃されている。奥羽山脈側と比べると阿武隈山系では、まだそれほど多くないようであるが、太平洋沿岸の大熊町でもクマが目撃されたそう。現場で大クマに出くわすことだけは勘弁願いたい。



図7 クマの痕跡が見つかったため池（手前の林地内でクマの足跡などが発見された）

### つくばの某研究所にて

つくばの研究所内に住み着いている動物も少なくない。まず、よく見かけるのは、ウサギである。ぴょんぴょんとよく跳ね猛スピードで走る。最近は人間慣れしたのか日中でも見かけることが増えてきた。数年前、某研究所の本館2階、某領域長室の窓ガラスの外側に動物の足跡がついているのが発見された。当初、犯人にはハクビシンが疑われたが、うちのグループの動植物と魚の専門家である某氏の鑑定によるとアライグマの足跡だそうだ。

みなさんは、かなり昔、首都圏では日曜日の夜7:30に放映されていた世界名作劇場「あらいぐまラスカル」というアニメ番組をご存じだろうか？もう50年近くも前の番組なので知らない方も多いとは思う。しかし、私は、そのアニメの主人公、動物好きの少年スターリングとラスカルの出会いのような場面に遭遇することになった。土曜日の昼前に忘れ物を取りに職場に行ったときのこと。研究本館の前に車を止めて、正面玄関に向かおうとしたところ、近くの道路上にいたアライグマと目が合ったのだ。しばらくお互いにカタまって見つめ合うこととなった。その姿のなんと愛らしいこと。少年スターリングがアライグマを飼いたいと思った気持ちが分かるような気がした。そして、写真を撮ろうと5秒かそこら、振り返ってカメラを取り出す隙にその姿は消えてしまっていた。辺りを見回してみただけれど、二度とその姿を見ることはできなかった。

### 砂漠の農業試験所にて

ずっとずっと昔、まだ学生だった頃、私はイスラエル南部にある地方農業試験所に滞在していたことがある。私は砂漠の畑にかん水をしてジャガイモを育てる実験を行っていた。以下はその時分のできごとである。

当地の忘れられない記憶は、灼熱の乾燥地の圃場である。当然ながら暑さは尋常ではなく、あるとき作業に疲れ木陰でうとうとと昼寝をしていたときのこと。ふと目が覚め頭を上げると、尻尾の毒針をこちらに向け突進してくるサソリを間近に発見した。まどろみの中で、にわかには殺気を感じたのかもしれないが、これは本当に危なかった。直ちに反撃を開始したものの、サソリは堅く、踏み潰すのは容易ではなかった（がたいの堅さはムカデに似ている）。もしかしたら無用の殺生だったかもしれない。そのことを追求されたらお詫びするし

かないが、しかし、私の滞在中には試験所の女性職員がサソリに刺されしばらく休むという事件もあったのだ。

また、彼の地では、日没の頃になるとどこからともなくハリネズミが出没し、試験所の周辺をもぞもぞと歩いて行く。もぞもぞと前進しては立ち止まる。そしてまた、もぞもぞと前進してゆく。こいつらは、簡単に捕まえることができ、ペットにもできそうなかわいいやつだった。

ハリネズミを大型化したようなヤマアラシ (porcupine) もいた。こちらはハリネズミより図体が二回り以上大きく、ハリが太く固く気軽にペットにできるような存在ではない。

以前、某学会誌の記事<sup>1)</sup>に上記の出来事について書いたとき、ハリネズミとヤマアラシを取り違えて書いてしまっていた。唐突であるがこの場をお借りしてお詫びとともに訂正したい (学術論文ではなかったのも間違いに気がついた後も訂正していませんでした)。



図8 ワナで捕獲されたヤマアラシ (1990年, Israel・Yotvataにて)

また、あるとき、分析やデータ整理で遅くなり、砂漠の農業研究所で夜を明かしたことがある。私はそのとき、砂漠の夜の研究室で恐ろしい生物と遭遇することとなった。

ひとつは巨大蜘蛛である。それは、突如机上に出現した。巨大といってもせいぜい10cm程度だったとは思いますが、グワングワンと左右位相がずれた動きをする口まわりに配置された鋏角 (きょうかく) と触肢 (しょくし)。その姿と動きのグロテスクさといったらこの上ない。そして、あろうことかこちらに向かってファイティングポーズをとった。そのため、しばしにらめっこをすることになった。その姿はいまだに脳裏に焼き付いている。

同じ夜、同じ研究室に出現したのは蛇である。それほど大きくないそれは、いかにも沙漠にいそうな淡色系の色彩を身にまとい、深夜、研究室の机の間の通路に現れ、その中央をしずしずと進んできた。私は一目見て、これはかなりヤバイ毒蛇だと直感した。夜の研究室にはにわかに緊張が走った。蛇と対決する勇気がない私は、とりあえず蛇を避け、そしてそれを見なかったことにした。しばらくして気配が消え、危機が去ったと感じた。

砂漠の中の研究室は、人のいない時間帯、別の生態系が支配していた。

## 優しいウシガエル

前述の通り、森はもはや人間のテリトリーではない。少子高齢化が進行し、縁辺部で急速な過疎が進む日本において、以前は人間が優勢であった里山でも森林でも撤退が進んでいる。残念ながら人間サマの領地は縮小傾向にある。

西南暖地\*にある標高約 1,200 m の高原でのこと。そこは観光地でもあり日中は人通りもあり、その周辺では普通に仕事ができるのであるが、しかし、陽が落ち人の姿が見えなくなる頃、様相は一変する。ふいに林から鹿の警戒鳴き声が聞こえる。鳴き声は大きくすぐ近くにいるようだ。だが姿は見えない。その声はあたかも「ココハワレラノモリ、ニンゲンハカエレ」とでも主張しているかのようだった。

同じように標高 500 m 超の山地に立地するあるため池では、夕暮れが迫ると突如ウシガエルによる大音量の合唱が始まる。もちろんその姿は見えない。そして、その鳴き声を聞いているとコチラは心細くなってくる。ウシガエルの声がクマカイノシシかなにかの獣の声のようにも聞こえてくるのだ。そのとき私は大声でウシガエルにお願いしてみた。「もう少し待ってくれ、あと 30 分もしたら帰るから」と。すると、優しいウシガエルは私の要望を聞いて大合唱を止めてくれたのだった。

## マムシ氏のこと

あなたは、マムシと遭遇したことがあるだろうか。私は日本を代表する危険動物のひとつであるその毒蛇に、できれば遭遇したくないと思いつけてきたし、これからも正直、出会いたくない。しかし、農業試験場の業務を遂行する上で、マムシと出会いそうな場所へ赴くことは少なくない。なにせ田んぼや畑といった農業研究者の生息地は、マムシの生息環境と完全に重なっているのだ。

私は、のちに訪れる出会いの瞬間までにも、飼育されているマムシであれば何度か見たことはあった。特に印象に残っているのは、学生時代に林業体験の一環として秩父の山奥に滞在したときのことだ。それはマムシ酒にするために飼われていたマムシだった。つたない記憶をたどるとマムシは餌がなくとも数ヶ月は生きるということで、胃腸の中を空っぽにするために餌なしでペットボトルだか一升瓶だかの中で飼育されていた。おそらく、私が目撃してからそう時を経ないうちにそのマムシ氏は焼酎漬けにされてしまったはずである。

もう、20 年以上も前のこと、鹿児島県の肝属（きもつき）山地の調査では、同行いただいた土地改良区の事務局長さんに、毎回のようにマムシに注意しろと口を酸っぱくして注意された。マムシは、湿気のあるところを好むことに間違いはないが、午後にはけもの道はもちろんのこと舗装路のようなところでも少し開け乾燥したところに居て、体を乾かしていることが多いそうだ。毎回、恐る恐る現場の山道で歩みを進めたが、幸いにもその現場でマムシ氏に出くわすことはなかった。

40 代の半ば頃、沖縄本島北部においてソバの栽培試験を行ったことがある。彼の地には、ハブがいる。ハブは言うまでもなく、わが日本国においてマムシと並び立つ代表的な毒蛇である。当然ながら当地の農業試験場にはハブが出没するし、ハブに噛まれるリスクも高い。

---

\*脚注：「西南暖地」とは、農林水産省もしくは農業研究の文書などにみられる表現で、明確な定義はないが、普通は高知県、宮崎県、鹿児島県など日本の西南に位置する温暖な地域を指す。

実際、私が通っていた沖縄県農業試験場の支所では、ある日の夕方、職員が圃場に続く道でハブに咬まれてしまった。

なお、この南の島に生息するのはハブだけではない。名護市の郊外では、なんとコブラが出たことがあるそう（どうやら定着しなかったようだが。。）。このことは本土ではあまり知られていないと思うが事実である。私など、コブラが居たと聞いただけで恐怖におののくばかりである。そのほかにも、近年は在来ハブより強い毒をもつタイワンハブという種類のワルモノが勢力拡大に向けて暗躍しているようだ。しかし、そんな沖縄でも私はハブやコブラに出会うことがなかった。誠に幸いだった。

もちろんそのほかの蛇とはちよくちよく出くわす。アオダイショウかシマヘビか分からないが気性の穏やかなヘビとは観音台の研究所の敷地内でもたまに見かけるし、一度などは、九州八代平野の農業用水路で、水路に入って流速計で流量を測定しているときに、股の間をニョロニョロとうねりながら水面を下ってくる蛇が通過していったことがある。



図9 あなたには見えますか？

...

そんな中、ワタシが本物の野生のママシに出会ったのは、およそ15年前のこと、仕事とは（あまり）関係ないシチュエーションだった。場所は岡山県東区、以前の瀬戸町。田んぼの畦道（あぜみち）を歩いていたときのことである。こちらが進もうとする畦道の少し先にヤツは居た。不安定な足元に気をつけながら注視する斜め下方向の視界のなかに、すでに鎌首を持ち上げている蛇が入ってきた。その頭蓋は特徴ある三角形であった。見まごうことはない。ママシである。

そのとき、ワタシは急いでいた。しかし、相手はそんなことを知ってか知らずか、退く素振りを見せなかった。両側がぬかるんだ田んぼではよけて通ることもできず、通せんぼを食らう形であった。記憶にあった予備知識によるとママシは飛ぶことができるとのことなので、慎重に距離を保ちつつ、なんとかそれを退けられないものかと考えた。まわりに小石でも落ちていないかと足元を探してみたが都合のよいものはなく、かといって回り道をするのも面倒だ。完全に進退が窮まった。

しかし、その後、数分間、ああでもないこうでもないと思案し、立ち尽くしているワタシを尻目に、くだんのママシ氏は、あっさりと道を譲ってくれたのだった。彼はゆっくりと脇の田んぼの草の中に消えていった。

そう、そんなに悪いやつじゃないんじゃないか。ママシ氏は・・・。

## 関連資料

- 1) 土壌の物理性、145、23-25 (2020)